体験版　(Black69cross/Nagisa)

ミラベルは恋の味

自分の周りがいつにも増して賑やかになりだしてから数週間、賑やかなのは嫌いではないがたまにはひとり静かに自分の世界に浸っていたい、そう思った新島雅黒(にいじま がく)は昼休みひとり学校の図書室にいた。
お気に入りの音楽をヘッドホンで聞きながら、目では先日創刊された新感覚のグルメ雑誌の記事と写真を追う。
自分だけの世界、自然と鼻歌がこぼれそうになる。
――と、その時だった。
背後に人の気配がしたのは。

「うっわ！　びっくりした、白夜か……って、なんて顔してんだよ、お前は……」
同学年で図書委員をやっている彼が図書室にいても別に驚くことではないのだが、何より彼らしくない酷い顔をして背後に立たれては、さすがの雅黒も驚くというもの。
それに、白夜がそんな顔をする時は決まってあの子、秋篠テマリと何かあった時と決まっている。
「もしかして、また……か？」
雅黒の問いかけに白夜は静かに視線を動かしてから顔を背けた。

「今度は何が原因だ？　っていうか、仕方がないだろ。二学期になってからやたらと周りが騒がしくなったのも、彼女がジュエルファイブをターゲットにしているのも……っていうさ、白夜。そんなに振り回されて苛立つならさっさと固まってしまえばいい」
雅黒は思う、白夜はやたらと秋篠テマリを気遣い彼女の相談から恋の手伝いまでしているのに、何かあると決まって機嫌が悪くなる。
それって、本人が気づかないだけで本当は好きなんじゃないかって。
「なんで僕がテマリちゃんと！」
そっぽ向いて機嫌悪かった白夜が突然声を荒げる。
静かな図書室中に響き、その場にいた者たちの視線を一身に浴びて慌てて口を手で塞いだが、捕らえ方によっては『水無月白夜は秋篠テマリには興味がない』となってしまう。
彼らしくない言動に雅黒はガクッと肩を落としながら大きなため息をついた。

続きは本編で…

秋の空と恋心

――なんでいるの？！

見慣れた昼休みの風景。
あの人の周りには、彼に占って欲しいと願う女生徒の取り巻きが絶えることがないのはもうここに入学してからの名物のようなもの。
あたし、最初は全くと言っていいほど興味なかったのよね、あんな課題を出されるまでは。
どうせ『恋の証』を手にいれるなら、上級な男をゲットしてやるわ！　と、あたしはジュエルファイブにターゲットを絞ったのだけれど……こういうことって考えることは皆同じだったりするのよね。
多分彼の周りにいる女生徒の数人は彼狙いだろうし、彼の占いで他のジュエルファイブを口説こうって人もいると思うの。
かくゆうあたしは断然後者なわけで。
ひとりに絞るよりとりあえず脈ありそうな人に猛アタックし掛けた方が効率いいんじゃないかって思って、使えるものは何でも使わなきゃ損！　ってことで、平等かつ下心に感づかれ難いだろうと思える数人に絞ってはみたものの……エメラルドの君こと碧山八重（みやま はちえ）先輩はもしかしたらかなり倍率が高いかもしれない。
あたしの調査ではルビーの君こと新島雅黒（にいじま がく）が倍率低そうなんだけど。
ほら、彼ってなんていうか口は悪いしちょっとＳっ気がするし。
付き合ったらいろいろ大変そうじゃない、なんていうのかな、恋人というよりは主従関係？
そんな彼と白夜が仲がいいなんて、ちょっと信じられないわ！
多分きっと、白夜が温厚な性格だから付き合っていられるのよね、そうに決まっているわ。
べ、べつに……倍率低そうだと思って最初にアタックし掛けて玉砕したからけちょんけちょんに評価しているわけじゃないわよ？
ん～ちょっとはその気持ちもないわけじゃないけど。
だって、普通女の子が手作りのお弁当作って差し入れしたら、最初くらい褒めてくれてもいいと思うのよ？
なのに彼ったら、ボロクソ評価してくれて。
もう悔しくて悔しくて、なんかひとつくらい凹ましてやりたくて……黒魔術でドカーンとなにかって思ったけれど、新島雅黒も黒魔術だったと思い出して、無駄な反撃はやめることにしたわ。
相手にしなきゃいいだけよ！
な～んて、負要素満載の回想はこれくらいにして、なんでいるわけ、あんたが！
あたしの視線は碧山先輩を取り巻くひとりを必死に目で追っていた。

続きは本編で…

黒と白のコーシュカ

「ちょっと、どういうことなのよ、ニャー！　主人であるあたしがまだだっていうのに、あなた使い魔のネコの分際で、主人より先にって、いったいどういうことなのよ！」

放課後の私立オルタンシア学園中に響き渡るくらいの声でテマリのやつが騒ぎ出した。
声色からわかるように、嬉しくて騒いでいるんじゃないぜ。
とにかく気に入らないっていうか悔しくてヒステリックになっていると言った方が正しい。
その根源はなんでか俺様ってことになっている。
テマリも言っているように、俺はあいつの使い魔で黒ネコの姿をしている。
テマリ以外にはニャーニャーと鳴いているようにしか聞こえないが、俺たちはちゃんとテマリの種族、いわゆる人間の言葉で意思の疎通が出来るわけなんだが……

『落ち着けって、テマリ。日向がビックリしているぜ？　いいのかよ、一応狙っているジュエルファイブのひとりだろ？』
後ろの二本足で立ち上がり、テマリの足に縋りながら宥めてみる
――つーか、正直めんどくせー。
「え？　日向くんが？」
女ってこぇ～と思った、一瞬にして声のトーンが変わり、日向紺の方を見るテマリ。
――が、見たと思ったらまたすぐ俺の方へと向きを変え、小声でこんなことを言い出す。
「ちょっと、ニャー。そういうことは最初に言ってよね。で？　なんであんたが錬金術科にいるのよ」
それはだな、テマリ。おまえの為に日向紺の調査をだな……と、言えたらどんなにいいか。
俺、そんな気全くなかったからさ、そんな嘘もつけないわけで。
それに、そんな事の為にこの錬金術科にいるなんて、テマリははなっから思ってもいない。
つーか、目が据わっていて怖いし……
『なんでってさ、見たまんまだろ。今俺が何を言っても、絶対おまえ信じないだろうし』
「あたりまえでしょ？　あたしを差し置いて、あんたはあんな、あんな真っ白で美人のネコと……」
『いや、だからそれそのものが誤解っつーかさ』
「どこがどう誤解なのよ。楽しそうに寄り添っちゃって……」
ま、確かにテマリみたいに思い込んじまったらそう見えなくもないけどさ、俺としてはとっても虚しい。
だってさ、テマリの言うその真っ白で美人のネコっていうのはさ……
――と、隣にいるそのネコを俺がチラッと見ただけで、テマリの形相がもうなんというか、恋する乙女というより嫉妬に狂う般若のようで……俺はもう何も言えないだろ、そういう女の子に対してはさ。
言うだけ無駄っていうか、火に油注ぐようなものだし。
別に、俺とテマリがどうとかって仲じゃないぜ？
主従関係っていうのか、一応俺たち。

そういう関係上、なんというか、やっぱりいろいろある訳だ。
どんよりとした空気が漂うこの錬金術科の教室で、日向紺だけは淡々と自分の世界を貫いている辺り、もうただモンじゃないと俺は思ったね。
なんていうか、年下でもこいつをターゲットにするのはテマリには荷が重いっつーか、ぶっちゃけ無謀ってやつだ。
俺が思うに、無難に幼馴染の水無月白夜にしておいた方がいいと思うね。
俺は辺りを見回してふぅ……とため息をひとつこぼす。
その時だ、またひとりお呼びでない人物が登場したのは――

続きは本編で…

菫の花も紫に似て

執り弓の姿勢から射位、足踏みと動作が動いていくと今までざわついていた声はもう耳に入らない。
入らないという言い方が正しいのか、周りが静かになったと言うのが正しいのか、もうこういう姿勢に入ると私にはどうでもいいこと。
弓道の道場も例の一件が公表されてからというもの、私の望んでいない状況が多々起こっている。
決してそれが迷惑というわけではない。
ただそうまでしても私は私で、変わる事などそうそうないということ。
しかし、そんな私の心はある事情から少しずつ変化をしているのかもしれない。
静かな空間、心を落ち着かせ意識は視線の先にある的であることに変わりはないのに、どこかであの子の姿や声を探している。

◆◇◆◇◆

今回の校内新聞はジュエルファイブのアメジストの君こと七瀬紫陽さん！
なんとこのアメジストの君に無謀にも猛アタックを宣言した魔女

科二年生の秋篠テマリ
この無謀な展開の結末はいかに！

◆◇◆◇◆

――というものが掲示板に貼り出されたのは今週の月曜日のこと。
瞬く間にこの内容は校内に知れ渡り……
「凄い話題の的だな、七瀬」
私の中で一、二を争うくらい出きれば関わりあいたくないと思っている城崎先生に捕まり、続いて新島の声が廊下の奥から聞こえ、視界の中に水無月の姿が入る。
水無月がいるということは必然的にこの校内新聞に堂々と名前を書かれている彼女もいることだろう。
私はどうでもいいが、年頃の女の子としてはどうなのだろう。
できれば私はこの場から去った方が懸命なような気がするのだが、城崎先生がそれを許してはくれなさそうなのは明白。
案の定、取り巻く生徒達に囃し立てられ、彼女が私の前に押し出されてきた。

続きは本編で…楽しんで頂ければ幸いです
Black69cross/Nagisa